鉄砲洲神社詩吟　素読論語解説
（平成 24 年 12 月 7 日）

【七】子貢、政を問う。子曰く、食を足し、民　之を信ずと。子貢曰く、必ず已むことを得ずして去らば、斯の三者に於て何れをか先にせんと。曰く、兵を去らんと。子貢曰く、必ず已むことを得ずして去らば、斯の二者に於て何れをか先にせんと。曰く、食を去らん。古自り皆死有り。民　信ずる無くんば立たずと。

子貢が政治の基本について尋ねました。孔子が言うには、お腹が満足すれば民は信ずるであろう。子貢がやむを得ない事情がでてきたら、どの項目から削りましょうかと尋ねました。孔子が答えて、まず、軍備面を削るのがよい。子貢が、残った二つの中のどちらを先に削れば良いかと尋ねたところ、孔子は食べ物を削るべきである。古来から人は必ず死ぬものである。従って国民に国家を信じようと氣持ちがなければ、まつりごとはできるものではないと答えました。

【八】棘子成曰く、君子は質のみ。何ぞ文を以て為さんと。子貢曰く、惜しいかな、夫子の君子を説くや。駟も舌に及ばず。文は猶　質のごときなり。質は猶　文のごときなり。虎豹の鞟は、猶　犬羊の鞟のごとしと。

棘子成が言うには、君子は中身が必要である。表面だけ飾り立てているのではいけない。子貢が言うには、惜しいことを言われたものだ。孔子が君子を説くについては、口から言葉が出るとその言葉を訂正しようと思っても四頭立ての馬車が追いかけても追いつかないと思いなさい。表面的に表れてくる実質面の素晴らしさというものも同じであって、表面と中身がしっかりしていれば人間として素晴らしいと言えるし、虎や豹のなめし皮も犬や羊のなめし皮と同じであるという様なものではないか。やはり人間の見た目というものも、その人を表している。その素材も当然表面を見ることで中身が見えてくるものだ。

【九】哀公　有若に問いて曰く、年饑えて用足らず。之を如何にせんと。有若対えて曰く、盍ぞ徹せざると。曰く、二すら吾　猶足らず。之を如何ぞ、其れ徹せんやと。対えて曰く、百姓足らば、君　孰と与にか足らざらん。百姓足らずんば、君　孰と与にか足らんと。

哀公が有若に政について聞かれました。「今年の飢饉で納税も思うようにならない。国の財政が著しく不足しているのはどうしたら良かろうか」と。ここら辺は面白いのですが、有若は税金を十分の一減らせばよいと答えました。哀公は増税をしようと考えていたのにも関わらず減税をせよとの返答で、「十分の二。二割税金を取っても、我が国の財政は不足である。どうしてそれで減税ができようか」と言われました。有若答えて「国民みな生活が安定して十分な食事も取れることは、国民が富むということであって、国民が富めば、君子ひとりだけ貧しくなることなどあり得ません。国民と君子は一体のものであると考えれば良いでしょう」と。

これらを現代に置き換えて考えて見れば、今の政治は正反対の方向に行っています。ただアベノミクスが出てきたことによって、国民の目が政治に向いてきたので、ここ半年ぐらいは意識して政治の動く方向をよく注視するべきであると思います。ただ増税路線はよくない。みなの負担を増やそうとしているのも良くない。生活保護をカットしようとしているのも良くない。もっと違う方策があると思うので、それは今後の半年間ぐらいの間で安倍政権の本質を見極めなければならないと感じます。

増税路線をとる国は滅び、減税路線をとる国は富む、という古来からの考え方を今実践すべき時でしょうが、流れとしては増税に向っているのが日本を転落させる危険度が増すと受け止めてよいでしょう。

人間中身が充実してくれば、知らず知らずの内に表情に表れてくる。日々が穏やかで、満足した生活を送れれば、素晴らしいと言えるでしょう。